

目次

言語資料としての和泉家古本『六議』	
——天理本『狂言六義』との比較をとおして——	小林賢次……………一
狂言と忌みことば・祝いことば	
——鷹保教本の場合——	蜂谷清人……………三
室町時代における副詞について	
——「カナラズ」と「サダメテ」をめぐって——	坂詰力治……………七
洞門抄物における「代語」と「代語抄」	
——大中寺第十三世天南松薫和尚の場合——	樋渡登……………七
堀川波鼓の表記について	坂梨隆三……………九
近世笑話の表現	中村明……………二三
本居宣長『古今集遠鏡』における敬讓助動詞	
——「しやる・さしやる」をめぐって——	塩澤和子……………二四
武家女性消息における女房詞について	諸星美智直……………二六
江戸・明治期の漢文訓読と一齋点	齋藤文俊……………二五

近世の通俗文体としての黄表紙の文章……………久保田 篤……………三〇七

『東海道四谷怪談』において

東国風の言葉遣いをする人たち……………古田 東朔……………三〇三

因果関係を示す接続の「デ」「ノデ」の位相……………田中 章夫……………三〇〇

江戸語の疑問表現に関する一つの問題

——終助詞「な」「ね」が下接する場合の自問系の疑問文の形式——
……………中野 伸彦……………二九六

近代における大和言葉の残像

——「むらさき」を中心に——……………土屋 信一……………二九七

『日米和親条約』の言語と文体

——漢文和解版の「候文」と蘭文和解版の「べしべからず文」——
……………清水 康行……………二九三

漱石の振り仮名表記——「ごころ」の場合——……………京極 興一……………二八八

「(人)とあう」という言い方の成立について……………鈴木 英夫……………二八七

「頼む」と「に」格……………岩下 裕一……………二八七

動詞状態相の諸問題……………森田 良行……………二八三

意味の縮小と文体差

—— possible の補助動詞エルをめぐって——……………渋谷 勝己……………二八〇

語音構造から意味・用法へ

——二音組み合わせ構造のオノマトペ分析から——……………細川 英雄……………二七三

北部九州方言のカ語尾形容詞型の形容動詞……………杉本 妙子……………二七〇

受動文の固有・非固有性について……………金水 敏……………二六三

『語学独案内』における打消の

助動詞「ない」「ぬ」とその用法……………松村 明……………二六九

資料編 坪内逍遙筆『日本文典』……………松村 明……………二六一

執筆者略歴…………………………二六一

三

以上、江戸語においては、自問系の疑問文に、「な」、「ね」（及び、「の」）の下接する場合、現代語と違って、疑問文の文末に、「か」、「かしら」、「う・よう」、「け」が、必ずしも必要でないことを述べて来たのであるが、江戸語においても、「か」、「かしら」、「う・よう」、「け」を文末に持つ例を見ることができない訳ではない。

(46) 彦「コウく眉毛をぬらさつし。彼れが方が化物だぜ。なるほどさうも誑ばなしがしてへかナア。あきれもしねへ（浮世風呂 四編へ文化十刊） 卷之上24ウ7）

(47) 妻こと八郎兵衛さんへモシくおきなんしなナゼ其様にねむひことでさんすかねへたま〜お出なんしながらほんにわたくしのやうにくろうのたへぬものはさんせん（妓情返夢解 120下7〜8）

(48) ねすこう見や。アノがんしよくではむつかしい。縁遠いといふわけが。さつぱりした「ぼじ」イヤおまいはこのあんなへめが。丙午だといふことを。どふしてしらしやつた「ね」ナニそのうへにひのえむまかへ。コリヤかよつたはなしじやアねへ「む」ソノ簀どのが見てへものだ。どんないる男かしらねへ。大わらひだ（江の島土産 三編へ文化七刊）

2012〜3）

(49) 後「へ、ン妙手を指てナ。サア逃ろく。能かく。逃たナ。そこで何を打てやらうな。ヤもう一間角を突込め（浮世風呂前編 卷之下13ウ7〜8）

(50) ●此まあお寒さはどう致した物でございませうネ ■さやうさ今年は余寒が強うございまして。あのまア雪を御覧じましな（浮世風呂 三編へ文化九刊） 卷之上21オ2〜3）

(51) かげハ「御遠慮なくこちらへお上りなせへハテどうか見申たやうなお子だといふかれば娘「ハイ久しくお逢申せせん

わちきは唐琴屋の かげハ「ハイどなただッけネ娘「ハイアノウ久しく本家に居ましたから かげハ「エハ、アやつともひ出したお蝶さんでございませうか（春色梅児誉美 四編へ天保四刊） 卷之十二14ウ1）

「か」、「かしら」、「う・よう」、「け」を持つものの方が、量的には多く見られるようである。表1は、いくつかの作品（明和寛政期の洒落本『遊子方言』、『甲駅新話』へ安永四刊）、『総籬』へ天明七刊）、『傾城買四十八手』、『浮世風呂』へ文化六〜十刊）、『浮世床』へ文化十〜十一刊）、『古今百馬鹿』、天保期の為永春水の人情本『春色梅児誉美』へ天保三〜四刊）、『春色辰巳之園』へ天保四〜六刊）における、自問系の疑問文への、「な」、「ね」、「の」の下接例を、疑問文の形式によって分類し、それぞれの用例数を示したものである。(6) 先ず、「何」、「いつ」などの疑問語（表中では、「何」で代表させて示した）を有するか否かによって分け、ついで、文末における「か」、「かしら」、「う・よう」、「け」の存在に着目して「か」、「かしら」、「う・よう」、「け」、「い」ずれも有さないものは、「○」で表した）、分類した。

〔表1〕

合計	「何」なし		「何」あり		遊子方言	甲駅新話	総籬	傾城買四十八手	浮世風呂	浮世床	古今百馬鹿	春色梅児誉美	春色辰巳之園	合計
	—う(よう)か	か	何何—う(よう)け	何何—う(よう)○										
2			2		な	な	な	な	な	な	な	な	な	な
1		1		1	ね	ね	ね	ね	ね	ね	ね	ね	ね	ね
1														
0			1	2										
1	2	1	1	2										
6			2	3										
0														
2		2	1	3										
0														
0														
2				2										
5		3	2	3										
7	1	3	3	3										
3														
0			3											
8	1	6	1											
0														
2				2										
1														
0														
14		5	1	8										
0														
13	1	5	6	1										
4		1	1	1										
10	0	3	0	7										
40	2	13	2	21										
31	3	11	3	7										